

アストラゼネカの社会 貢献による共生・対流の 取組を紹介

平成21年3月 第6回 オーライ！ニッポン大賞を受賞した「アストラゼネカ(株)」は、秋の一日をC-day (Contribution day) として休業日にし、全従業員約3000人で農作業、山仕事、環境整備作業のお手伝いを行なう社会貢献活動を実施しています。

今年で5年目を迎えるこの活動は、北は北海道富良野市から南は沖縄県国頭村までの40都道府県60か所に、社員が10数名から150名程度のグループに分かれて訪問し、訪問先の地域のニーズに応じて農作業や山仕事、環境整備作業などをお手伝いするほか、地域の方々との交流を目的に、アストラゼネカが本プロジェクトのために独自に開発した体操や懇親会なども実施します。

活動の目的や、地域の皆さんと社員のリーダーとの連携や農作業を安全に行なうための手引きや、活動推進の方法・プロセスなどをオーライ！ニッポンWEBサイトから本プロジェクトの担当しているアストラゼネカ(株)コーポレートマネジメント統括部広報部の小野亜希子氏からご紹介していただいています。



最初に「従業員3000人による社会貢献活動アストラゼネカ株式会社」連載の趣旨等を説明しました。

第1回「活動の目的について」(7/14)は、これから約5カ月間にわたって、全従業員3,000人で棚田地域などの中山間地域で社会貢献活動を実施する「高齢化する村を応援するプロジェクト」についてご紹介の説明。社内ではこの活動をC-day (シーデイ、Contribution day = 貢献する日 の略) という愛称で呼んでいること、また農山村での社会貢献活動を検討されていらっしゃる企業や、企業ボランティアの受け入れに関心をお持ちの農山村の皆さまにとって、何か少しでも参考になることがあればと連載をスタート。



第2回「活動の趣旨説明のため地元を訪問」(7/21)は、C-dayでは、社員と地域の皆さんとの絆を深めていきたいと考えているので、基本的に毎年同じ地域で継続して活動している。「十分お手伝いできる時間を確保したい」という社員の声に応え、移動時間を短縮できる場所へと活動地域を変更する、あるいは追加するケースがあり、その結果毎年少しずつ訪問先が増えている。活動地

オーライ！ニッポンニュース

夏は夏らしく暑いのがよいというものの、今年の夏はかなりの猛暑です温暖化防止を考えつつも、熱中症にならないように、空調と水分補給はしっかりと。屋外の活動にも気を付けて皆様方もご愛ください。平成22年8月12日



域については、協力団体のNPO法人 棚田ネットワークに推薦していただいている。

第3回は「第3回 農村景観日本一の地区が活動地域に」(7/28)今年新たに活動する地域の一つが、岐阜県恵那市岩村町富田地区。6月28日にNPO法人 棚田ネットワークの中島先生と一緒に伺いし、ごあいさつと活動の趣旨説明を実施。

第4回「「キャプテン」が各地域の活動を企画・推進」(8/6)は、社員から公募で選ばれるキャプテンが全国各地域でどんな活動が求められているかを把握し、地域のニーズに合ったC-dayを企画・推進する。各地域の事情を考慮して開始・終了時間を調整したり、交流会を実施とキャプテンの裁量に任されている。というように、今年の11月までの毎週連載が継続します。ぜひ、オーライ！ニッポンWEBサイトをご覧ください。

情報戦略＋若者支援の ワーキング・グループ開催

企画委員会(丁野朗 座長)の下に設置された3つのワーキング・グループのうち、情報戦略WGと若者支援のWGが平成22年7月20日に合同で開催されました。

- ① 共生・対流情報戦略ワーキング・グループ(WG)クロスメディア方式による効果的な広報を行なうための戦略の検討と実践のために設置する。オーライ！ニッポン大賞や「ようこそ！農村へ」キャンペーンのプロモーション戦略等も含めた幅広いキャンペーン活動の推進方策について検討を行う。
- ② 若者の支援ワーキング・グループ(WG)農山漁村で活躍する若者の活動に詳しい識者や若者を受入れている都市農山漁村交流の実践者、実際に農山漁村や過疎地を訪問・滞在した若者等を部会委員とし、ヒアリングや意見交換形式により事例情報の収集や推進方策を検討する。

○情報及び若者支援WGの企画委員は以下とおり

- 甲斐良治 (社)農山漁村文化協会編集局 季刊地域・シリーズ地域の再生グループチーフ、
- 鈴木賀津彦 市民メディアプロデューサー、東京・中日新聞編集局次長
- 中島康夫 (株)電通 クリエイティブ開発センターCI開発部
- 中村直美 交通新聞社 第1出版事業部長、旅の手帖編集部長
- 安卓也 (社)全国農協観光協会 地域振興推進部長 以上

若者支援WG第1回ヒアリングを実施

30府県の70の限界集落を半年かけて訪問し、農山漁村の人々およそ300人と交流

した25歳の青年、友廣裕一氏を招いて、若者はなぜ農山漁村を目指したのか。農山漁村を旅して感じたこと、これからの活動、さらに若い人たちの農山漁村での活動への支援の在り方を意見交換しました。

1. 友廣氏のプロフィール

大阪出身。08年3月早稲田大学商学部を卒業。

学生時代より、早稲田の街で学生と地域をつなぐ『街プロジェクト』の企画や社会起業家のビジネスプランコンテスト

「STYLE4th」の運営など地域を初め、社会を良くするための手段としてビジネスを行うことについて関心を持ち、精力的に活動。大学卒業後は、地域に関する企業の立ち上げに関わった後、地域の現場をより広く・深く知りたいという思いから日本一周の旅をしようと決意。

そこで、地域の魅力を自ら全国に発信する限界集落・過疎地 日本一周プロジェクト『ムラアカリをゆく』を企画し、その地に根を張って暮らす方々の家に泊めていただき、農林漁業・酪農・畜産・まちづくり・ものづくり・伝統芸能など様々な手伝いをしながら、180日間で約70箇所に滞在。

2. 友廣氏の主な活動

- ムラアカリをゆく / (株)アミタ持続可能経済研究所アソシエイト・フェロー
- 対話を通して社会について考える『Social Designers' Community』主宰
- 墨田区 食育推進会議 外部推進委員
- 起業支援ネットワーク『NICe』 Dailyニュースパーソナリティ
- 世田谷区の自由大学の教授(モデレーター)などで活動中。
- 自身のブログ「ムラアカリをゆく」で情報発信中。

3. ゲストスピーチの内容

友廣裕一氏のゲストスピーチの内容は、下記のサイトからご覧になれます。

<http://www.ustream.tv/recorded/8393829>

第8回オーライ！ニッポン大賞募集開始！

〆切は11月25日 表彰式は平成23年3月9日(予定)

都市と農山漁村の共生・対流の優れた取組を表彰する「第8回オーライ！ニッポン大賞」の募集をします。「都市側から人を送り出す活動」「都市と農山漁村を結びつける活動」

「農山漁村の魅力を活かした受入側の活動」について優れ貢献のあった団体、若しくは個人を表彰します。

■募集部門

幅広い共生・対流の活動事例からの応募をいただけるよう、募集は4つの部門を設置

■①学生・若者カツヤク部門（受入世代・活動構成員が概ね30代）・・・若い世代（子ども、学生など）が農山漁村地域を往来し、地元の方々と地域づくり等に取り組んでいる、農山漁村に定住して起業したり地域活動に取り組んでいるなど。

■②都市のチカラ部門・・・都市部の企業、NPO、グループ等が農山漁村地域と連携して環境保全や遊休農地解消などの活動や定期的な交流を行っている、都市農業の振興が図られている取り組みなど。

■③農山漁村イキイキ実践部門・・・都市と農山漁村の交流に関する取り組み、地域再生活動、コミュニティ・ビジネス、森・里・海が連携する活動など農山漁村地域が主体となった取り組みなど。

◆④ライフスタイル賞・・・そして、Iターンや二地域居住等により農山漁村において個性的、魅力的な新しいライフスタイルを実践している個人が対象の「オーライ！ニッポンライフスタイル賞」。例えば、◎定年を機に生まれ故郷にもどり、農山漁村での生活を楽しんでいる事例◎農山漁村地域へ移住し、地域資源を活用したビジネスを実践している事例◎農山漁村地域へ移住・往来し、森林保全や海づくりなどの活動を実践している事例◎農山漁村を自身の夢の実現の場として活用している事例 など

そのほか、民間企業、団体、各省庁等が実施している表彰事業と連携し、共生・対流の主旨と合致する事例の推薦を受ける連携表彰事業も実施します。

■表彰の種類

①オーライ！ニッポン大賞

オーライ！ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞を申請予定）・・・1件

オーライ！ニッポン大賞並びにフレンドシップ大賞の中から、もっとも優れている事例を選定

オーライ！ニッポン大賞・・・4件程度

原則、部門毎に1事例以上選定

審査委員長賞・・・数件

②オーライ！ニッポン ライフスタイル賞（数件）

※ オーライ！ニッポン大賞の表彰は、オーライ！ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞）をはじめ、オーライ！ニッポン大賞、審査委員長賞、ライフスタイル賞で、審査委員会の厳正なる審査により過去7カ年間計108件を選定し表彰（オーライ！ニッポン大賞79件、ライフスタイル賞29件）しました。

平成18年度からは、本表彰事業の趣旨と合致すると思われる他団体等の表彰事業と連携を図り、オーライ！ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞）候補として推薦を受け選考を行なっています。

◎審査委員

井上 和衛 明治大学名誉教授
岡島 成行 公益社団法人日本環境教育フォーラム理事長

柴田 耕介 社団法人日本旅行業協会理事長

長岡 杏子 TBSアナウンサー
平野 啓子 語り部、かたりすと、大阪芸術大学放送学科教授

松本 零士 社団法人中央青少年団体連絡協議会会長

元石 一雄 公益財団法人日本生産性本部常勤顧問

安田 喜憲 国際日本文化研究センター教授

7カ年間にのべ888件の共生・対流の事例の応募があり、さまざまな活動のタイプから、農山漁村地域をはじめ都市部においても取組みの輪が広がりを感じます。

募集についての詳細は、オーライ！ニッポンWEBサイトをご覧ください。「オーライ！」と検索ください。

※ オーライ！ニッポン全国大会は、平成23年3月9日東京で開催します。

GT商品コンテスト優秀賞はどのような商品が選ばれるか？

「ようこそ！農村へ」キャンペーンの一環として取り組んでいるグリーン・ツーリズム商品コンテスト2010の募集がスタートしています。

今年の優秀賞はどのような商品が選定されるのか大変、楽しみなどころですが、全国のグリーン・ツーリズム関係者、共生・対流の取組む関係者のみならず、農山漁へ遊びに行きたい一般の皆さんも含めて、どのような商品が期待されているのか大変興味をお持ちと思います。

そこで、昨年度、優秀賞を選定の事務局が感じたポイントを整理しましたので、参考にしてください。

「グリーン・ツーリズム商品コンテスト」は、7月上旬から9月末までの応募期間に全国から66件の商品の応募がありました。旅行の商品化ほど難しいものは無い。消費者旅行者のニーズが細分化、激変しているなか、応募された関係各位は、それぞれの知見を活かし、企画やアイデアを総動員して商品化に取り組んだことが十分見て取れました。

しかしながら、企画へのアイデアや着眼点がいくら良くても、商品として具体的に完成度を高める段階でなぜか魅力が薄まる、逆に商品のまとまりは良くとも特徴がなく訴求力に欠けるといった総合的なバランスが損なわれてしまうことも良くあります。

また、これまで商品化が遅れていたグリーン・ツーリズムについては、とりわけ流通面に課題が存在し、消費者にグリーン・ツーリズム商品が届いているとは言えない状況にあります。

商品はお客様が購入（参加）してはじめて成り立つことを考えると、どのようなお客様に対して、どのような商品を提供するのかといった問題意識のなかで、優秀賞には、次の6つの視点をクリアすることが求められると感じました。

1、旅行のテーマ、目的、ターゲットが明確である。

2、地域の食材や伝統工芸品、農林漁業体験、農村生活文化体験、自然景観、歴史遺産など、地域資源を活用したこれまでにない旅行商品である。また、広く地域振興に貢献出来る旅行商品である。

3、地元の人たち、地域の各種団体（自治体・観光協会・グリーン・ツーリズム協議会、交流事業・自然体験関係者、NPOなど）と協力して企画・造成されている旅行商品である。

4、選定したターゲットに対して、充実した旅行工程、魅力的な企画内容及び価格的にも

バランスが取れた商品。集客のための手法及び手段が適切に講じられている。

5、提案内容の旅行を催行することが確実に見込まれている。

6、次年度以降も引き続き継続的に実施・販売が実施される。

具体的には、以下の要素が重要となります。

- ① グリーン・ツーリズムを知らない消費者にまず興味を持って農村に行ってもらうために観光とグリーン・ツーリズムを上手く調和した商品
- ② 特にグリーン・ツーリズムならではの旬の食材を使うことや伝統芸能、自然観察など農山漁村の資源を使いつつ、それぞれがバラバラの部品でなく、地域としてのストーリー性がある。
- ③ ターゲットと絞り込み、エコロジーの観点も取り入れた商品など魅力的な企画を上手く商品化したもの
- ④ 消費者の目線で見たとときに自分もぜひ行ってみたいという商品
- ⑤ グリーン・ツーリズムの課題であった商品を流通させることを考えバランスの取れた内容の商品

今年は、どのような優れた商品が優勝賞に選定され、モニターツアーが実施されるでしょうか。多くの商品の応募をお待ちしています。

TBSテレビ「夢の扉」

心に残る島を、次世代に引き継ぐために2015年までに、島に雇用を50名つくりたい

平成21年3月、第6回オーライ！ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞）を受賞した長崎県小値賀町の特定非営利活動法人おちかアイランドツーリズム協会がTBSテレビ「夢の扉」に取り上げられました。番組では、長崎県の五島列島の北端に位置する人口3000人の島が、昔からある島の景観や自然を売り物にして観光地として新たな収益を生み出し注目されている。

その発案者で2004年に小値賀島に移り住んだ高砂樹史さんは元劇団員として全国各地を公演で回りながら、自分の住む理想の地を探し、小値賀島と出逢い移り住むことを決意。このままの状態であっておけば消滅してしまう危険の小値賀を守るために、観光事業に取り組み、年間1300人ももの修学旅行生がやって来るようになった。

その秘密である農家や漁師の自宅を利用した民泊と高砂さんの進める島再生術に紹介しました。

・TBS 夢の扉

<http://www.tbs.co.jp/yumetobi/backnumber/20100704.html>

〒101-0042 東京都千代田区神田東松下町45番地
神田金子ビル5階（財）都市農山漁村交流活性化機構
内 オーライ！ニッポン会議 TEL03-4335-1985